

退職するにあたって

大阪市立都島中学校 西垣栄作

37年間の教員生活にピリオドを打ち、この3月で定年退職をいたします。新北野で1年講師をしてから、理科の教師として採用され佃中学校に赴任してからは3年の担任を持つことも多く、昭和最後の年に進路指導主事をしたあと、5年間の高校派遣の守口東では学級担任として高校生をも卒業生で送り出したことなど、30代の前半までに本当にたくさんの貴重な経験をさせてもらいました。派遣終了後も中学校に戻って大正中央・平野と続き、平成8年度からは養護学級（特別支援学級）の担任となって、旭東・鶴見橋・生野・都島中と異動してきました。思えば、24年にわたり特別支援学級担任ができたのも、生涯絶対に忘れないひとりの生徒の存在があったからでした。初めて2年の学級担任をしたときの松葉杖をついた男子生徒について述べたいと思います。

彼は中1の2学期まではとても活発な中学生だったようですが、3学期に入って右足に異常を訴え、診断で骨肉腫であることがわかり、膝上からの切断手術を受けていました。抗癌剤などによる治療が長引いてしまい、2年になってからも1日も出席できず、普通であればそのまま3年に進級になる予定が、彼は両親にもう一度2年生からやり直したいと自分の思いを伝えることで望みが叶えられ、それがきっかけとなって彼とのかかわりが始まりました。

3年には元の同級生はいますが、そんなことは気にもせずに登校している姿はとてもすがすがしく感じられました。まわりの生徒たちは当時エレベーターもない環境の中で、移動教室や階段の昇降などにもいろいろとサポートしてくれ、自分は学級担任として特に何をするわけでもなく過ごす毎日でした。

1学期を終えようとした夏休み前に検査結果で他にも癌の転移が見つかり、それから4ヶ月間の入院生活を送ることになりました。経過観察しながらも再び登校することができるようになると、以前にも増して自然と彼が何かクラスを中心にいるような学級作りをしていました。徐々に癌細胞が彼の身体をむしばみ、3年生となって引き続き担任になってからも入退院の繰り返しで、後半は全く出席することができなくなり、ついに卒業の日を迎えました。学校に来ることはできませんが、私からお願いして病院の一室でひとり卒業式をしてもらうことになりました。彼の名前を読み上げて学校長からやさしい手で卒業証書を受け取る姿は、今でもはっきりと脳裏に焼き付いています。卒業後も顔を合わすことはありましたが、言葉数も少しずつ減ってきて、残念ながら17年というとても短い彼の生涯は終わってしまいました。

現在ではひとりひとりのニーズに応じた教育的支援の充実を図る上で、障がいの有無にかかわらず、生徒みんなが共に学び共に生きる教育を推進することが前提になっていますが、障がいという認識が正直いってあまり高くないまま教職の道を歩み始めたときに、たまたま出会った彼の存在は、長きに渡って障がいのある生徒とかかわっている自分に大きな影響を及ぼしたことは言うに及

ばず、今の私にとっての『教職の原点』になっています。

養護学級（特別支援学級）担当になってからは、まず保護者が特別支援学級に何を求めているかの意見交換を行いました。卒業後の進路選択の中で、抽出による指導をするときは、教科学習を重視してほしいと考えている保護者がいる反面、『自立』に重きをおく指導を願う保護者も少なくないこともわかりました。

そこでできるだけ保護者の要求に即した指導を模索するとともに、私が得意とする作業学習に対する思いを伝える努力をしてきました。特別支援学級の生徒たちは学習面での積み重ねはゆっくりでも、作業学習で習得した技術の伸び代は大きいものがあり、そのためには何をするにも経験が一番であることを伝えたかったからです。繰り返しの反復経験により上達した技術は、「ぼくにもこんなことができるんだ。」という個々の生徒への自信にもつながっていました。

私が『ものづくり』にこだわる理由として、彼らが中学校を巣立って成長し、いずれは直面するであろう『就労』を考えるうえで生じる課題や困難な状況に遭遇したとき、少しでも早いこの時期にひとつでも多くのことを経験し学んだことは、必ず役に立つと私は信じています。そして作業学習の重要性を教職員や保護者にも理解してもらい、障がいの程度にかかわらず、個々の能力の範囲内で、ひとりまたは複数で協力して作業学習に参加できるような取り組みになるように、いろいろなアイデアを出しながら、『ものづくり』というものの楽しさと厳しさを教えるよう心がけてきました。彼らがこれから生きていくための社会的自立としての力をつけていく方法を、作業学習を通して自分なりにはうまくできたかなと思っています。

今後は初心を忘れず、今までの学校での指導経験を生かして、定年退職後の4月からは数年間だけこれまでの総決算として再任用でお世話になるか、自らの挑戦として在住している奈良の地で、今年度に履修した介護関係や行動援護、同行援護、ガイドヘルパー等の資格を活かして、老人介護施設や障がい者施設などの従事者として新たな分野でがんばっていきたいと考えています。

そして最後になりますが、私が長きにわたりいろいろと関わらせていただいた『ふれあいステイ』が今後も長く続き、発展した行事になってくれることを強く願っています。

本当に長きにわたり、ありがとうございました。